

白藍塾オリジナル

2011入試小論文分析&解答のヒント

2011年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●慶応・文学部

課題文はいくつかの和歌を通して日本的な感性について分析したもの。簡単にまとめると、こうなる。

「文化や個人によって感じ方に個性がある。感じ方は、文化的環境によって育まれたものだ。日本の和歌などを見ると、日本人の空間の捉え方に、その個性が見られる。和歌などでは、遠景と近景が描かれ、中景が省略されていることが多い。これは日本人に固有の感性だ。西洋人の捉える空間は、透視図法的な遠近法からわかるように、遠景と近景を結ぶ中景が中心となり、その中景の部分が等質とみなされている。等質であるために科学的であり、生きている人間の空間とは異なる。ところが、それに対して、日本人の空間は、中景が省略されている。つまり、日本人は遠景を捉えるのに近景を支えとしており、そのために、日本的な空間は触覚的な接触を基調とする」

もっと簡単に言ってしまうと、著者は、日本人の描く風景などに遠景と近景の組み合わせが多いことを指摘しており、それによって、中景を重視して科学的な空間を描こうとする西洋人と異なって、自分の身体の接触によって遠景を成り立たせるという日本的な空間の捉え方を分析しているわけだ。

設問Ⅰは、「日本的感性に固有の空間性」とは何かを説明することが求められている。先に説明したことを制限字数にまとめればよい。

設問Ⅱは、著者の論じているような日本的感性について、①感性は普遍的なものであって、日本的感性などは存在しない、②昔の日本には個性的な感性があったが、現代社会になって失われてしまった、③日本的な感性は時代を超えて現代にも存在して

いる、という3つのうちのいずれかの立場をとって論じることが求められている。

ここで問われているのは、課題文で語られている空間における日本的感性のような限定されたものではなく、もっと一般的な日本的感性のようだ。したがって、空間における日本的感性に限らずもっと一般的に、ほかの感性（たとえば、音や味、時間などについての感性）について考えてもかまわない。

①の立場を選んだからといって、それだけで不合格になるとは思えないが、「感性は普遍的」というのは、かなり文化のあり方を理解していない考え方なので、よほどうまく書かないとレベルの高い文章にはなりにくい。

むしろ、②の立場をとって、現代の日本人が西洋的な感覚を身につけてしまっていることを書くほうがいい。その場合、日本人は子どものころから西洋的な考え方を教育され、西洋的な生活様式を営み、遠近法や科学的な空間把握がすでに常識になっていることなどを説明すればいいだろう。とりわけ、味や香りについても、日本的感性はなくなり、レストランや香水などが西洋化していることを示してもよい。

③の立場をとるとすれば、日本に特有の感性があることを説明すればよい。たとえば、秋の虫の声に日本人は情緒を覚え、美しいと思う。だが、西洋人は虫の声に対する情緒を持たない。また、「わび・さび」というような日本人独特の美意識がある。そのような例を示せばよい。

書き方としては、いつもどおりの四部構成でよいが、第一段落に「私は②の立場をとる」などとはっきり示した上で書く必要がある。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>